

教養学科、優れた先生方

第2期(1954年卒業) 明石 康

都心の広大な青山墓地の一角に外人墓地がある。その入口に石原慎太郎氏が東京都知事の時に建立した顕彰碑がある。それには「わが国近代化に指導的役割を果たされた」外国人の偉業や功績を称え、それを後世に伝えるためのものであると記されている。外国人嫌いの政治家だったはずなのにと、やや意外な感じを受けずにおられない。

この外人墓地の一隅に、「普連士学園」と刻んだささやかな石があり、そこにゴードン・T・ボールズと彫った小さな墓が見つかる。1904年6月25日、東京三田に生まれ、1991年11月10日にマサチューセッツ州で没したと記されている。この人こそ、東大教養学科が設立されて数年間、文化人類学と英語を私達に教えてくれた恩人である。

ボールズ先生の長身な風貌が忘れられない。やや前かがみに歩かれる深いまつげの奥でふと悲しげな表情を見せることがあり、私たちが勉強がよく出来ないためではないのかと、いぶかった。先生の文化人類学は、はじめは難しかったが、次第に我々の知的関心をそそるものになっていった。また我々はボールズ邸で毎週開かれるお茶の会に出席し、先生やゲストの人たちの会話に耳を傾け、さらに横目で美しいボールズ家におられる二人の令嬢の楚々としたサービスを追いかけていた。最初の頃ちんぷんかんぷんだった英会話も、一年通うとほぼ理解できるようになった。

ボールズ邸のお茶の会で知り合いになったジャクソン・ベイリー氏やダン・O・ノエル氏は、社会や政治への興味をともにする日米の若者として、熱心に論議を戦わせる好個の相手になった。国際学生セミナーやワークキャンプにも一緒に参加した。そうした過程を経て、下手だった英語も少しずつ通じるようになっていった。世代の近いこの友情は一生続くことになった。

国連に奉職するようになって、文化人類学を学んでおいて本当によかったと思った。学生時代には、マルキシズムとその歴史段階説が風靡していた。それに比べ文化人類学はといえば、それぞれの文化が完結した体系を持つもので、ニューギニア土着民族の文化もアメリカの発達した社会もその点では同格であ

ると考えられているのだった。ボールズ先生は「菊と刀」を書いたルース・ベネディクトの「文化の類型」の一読も我々に薦めた。私はこの本の方法論を使って、戦後の日本文化についてペーパーを書いてみた。その延長線で京都や奈良の社寺や仏像、庭園などに関心を持つようになった。

ボールズ先生のお話から、国籍や特定の宗教を超えたヒューマンイズムの香りを感じ取ることができた。先生が自分でクエーカー教徒だと言うことは無かった。しかしベイリー氏やノエル氏は自分たちはそうだと書いた。クエーカーは世界のキリスト教徒の1パーセントにも達しない少数派に過ぎなかったが、民族や国籍を超えた人間的な信条と平和主義にとって私の関心をかきたててくれた。国際連盟時代に活躍した新渡戸稲造氏もクエーカー教徒だった。

ボールズ先生だけでなく、教養学科アメリカ科の周辺には、すぐれて献身的な先生が幾人もいた。アメリカ史の中屋健一先生はその典型であり、教え方の厳しさには伝説的なものがあった。アメリカ政治思想史の斉藤真先生の新進気鋭な教え方にも意欲をかきたてられた。アメリカ憲法を実証的・社会学的に教えてくれた鵜飼信成先生もすばらしかった。フランス哲学をラテン的明るさで教えてくれたのは前田陽一先生だった。トーマス・ジェファソンの政治思想に付いて自宅で個人指導していただいたのは松本重治先生だった。日本思想史の竹山道雄先生や、比較文学の島田謹二先生、国際法の横田喜三郎先生など、多くの先生が私たちの崇拜の的だった。

全体として実に豪華な教授陣が知的養分を惜しみなく学生たちに与えてくれた。本物の教育を、その最先端にあった献身的な先生から直接、少人数で学ぶという贅沢な機会に恵まれたことに、感謝するばかりである。

今振り返ってみて、これまたわが身の大変な幸運だったと感じる先輩や同級の友人達のことは、また別の機会に書いてみたいと思っている。

以上